

令和6年度 第1回 長野県総合教育会議

日 時：令和6年12月26日（木）

10時30分～12時00分

場 所：県庁3階特別会議室

1 開 会

（松本参事）

それでは定刻となりましたので、ただいまから「令和6年度第1回長野県総合教育会議」を開会します。私は、本日の会議の進行を務めます県民文化部学び支援担当参事の松本と申します。よろしくお願いいたします。

2 あいさつ

（松本参事）

それでは初めに、本日は南信州からのオンライン参加となります阿部知事から、挨拶をお願いします。

（阿部知事）

皆さん、おはようございます。

今日、私は飯田合同庁舎から参加をさせていただいております。月曜日から明日まで南信州におり、木曽にも出かけてきましたけれども、県庁を離れて仕事をさせていただいておりますので、この会議もオンラインで参加をさせていただきます。

長野県は非常に広い県なので、県庁に皆さんが集まらなくてもいい県政にしていきたいという意見を持っていますし、また県庁の中にずっといると、どうしても意識しなくても長野市目線になってしまい、それぞれの地域の課題や特徴を見失いがちであるということで、今回は飯田にいらしていただいております。

今日の総合教育会議は、教員が学校等でチャレンジしたいことを支えるということと、子どもが地域の魅力を知り、地域と密接に連携した学びを展開するために必要なこと、大きくこの2点について皆さんと課題、方向性を共有し、次の具体的な取組につなげていきたいと考えております。

各教育委員の皆さんには、率直な意見交換の場となるよう御協力をいただきたいと思いますし、また、大変お忙しい中ゲストスピーカーで御参加いただく皆様におかれましては、ぜひ、日頃の取組や問題意識を共有させていただければありがたいと思っています。

長野県では、信州学び円卓会議を設置して、子どもたちの学びの在り方、教育の在り方を多くの皆様と共に考えてきました。円卓会議から出された方向性の中にも、学校の先生方がチャレンジできるような県にしていこうという方向性が示されていますので、私も武田教育長としっかり連携をしながら、学校の先生方の取組を応援していきたいと思ひますし、処遇の改善を含めて、働きやすい環境づくり、そしてやりがいを持って先生方が活躍

できる長野県をつくるために、知事としても努力をさせていただきたいと思っています。
「学校の先生、教員をやるなら長野県」と思っていたけるような県を目指して取り組んでまいります。

また、子どもたちが地域の魅力を知るということは非常に重要です。今、人口減少が大きな課題になっているわけですが、長野県に生まれ育った子どもたちが地域のことをあまりにも知らな過ぎるのではないかと、あるいは地域にある産業や企業とあまりにも接点がないまま学校を卒業して都会へ出てしまっているのではないかと、多くの皆様が共通する課題意識を持っています。ぜひこの点については、我々知事部局も、産業界はじめ多くの皆様と連携をして、子どもたちと地域のつながりがさらに広がるように取り組んでいきたいと思ひますし、教育委員会の皆様や学校関係の皆様におかれましても、地域のことを知ってもらうことや、地域とつながることの重要性を御理解いただいた上で、取組が一層進むよう、御協力、御支援いただければと思ひます。

挨拶が長くなりましたけれども、限られた時間で有意義な意見交換の場となることを、心から期待して冒頭の挨拶としたいと思ひます。よろしくお願いいたします。

(松本参事)

続きまして、武田教育長より、挨拶を一言お願いいたします。

(武田教育長)

皆さん、おはようございます。教育委員会からも一言御挨拶を申し上げます。

今日の総合教育会議につきましては、教育委員会でも課題と思っております二つの点を取り上げていただいたこと、ありがたく思っています。

1点目は、先生方のチャレンジを支えるということで、現在学校は多忙化が進んでおり、その業務をスリム化していくということが重要な点だと思ひています。今日は、学校現場の先生方も来ていただいておりますので、現場の状況や願いなどについて、ざっくばらんに思ひを語っていただけたらと思ひます。

2点目は、やはり学校は地域と共にあるということで、子どもたちが地域のことを知ること、学校教育では非常に重要なポイントであると思ひております。そういった意味で、今日は、上伊那の郷土愛プロジェクトの皆様の取組を基に、そのことを議論していただくということで、私どもも積極的に話し合いに参加させていただけたらと思ひます。

信州学び円卓会議からのメッセージを受けて、知事と共にメッセージを出させていただいたところでありますけれども、教員の多忙化等につきましても、知事からしっかり応援していただいているところですので、これからの方向について、共有できるものが出てくればいいと思ひているところであります。よろしくお願いいたします。

(松本参事)

ありがとうございました。

3 会議事項

(1)「教員が学校等でチャレンジしたいことを支える」ために必要なことについて

①県及び県教育委員会の取組について

②ゲストスピーカーを交えた意見交換

(2) 子どもが地域の魅力を知り、地域と密接に連携した学びを展開するために必要なことについて

①ゲストスピーカーによる事例発表

「郷土愛プロジェクト」の取組について

- ・上伊那広域連合 事務局長 唐澤直樹氏
- ・KOA 株式会社 経営管理イニシアティブ 地域価値創造センター
ゼネラルマネージャー 南部高幸氏

②ゲストスピーカーを交えた意見交換

(松本参事)

それでは会議事項に入ります。

本日の会議事項は二つ、一つ目が『『教員が学校等でチャレンジしたいことを支える』ために必要なことについて』、二つ目が、「子どもが地域の魅力を知り、地域と密接に連携した学びを展開するために必要なこと」についてです。

本日は、一つ目の会議事項のゲストスピーカーとして、安曇野市立穂高北小学校の小林奈美江教頭先生、千曲市立屋代中学校の早津秀先生、長野県丸子修学館高等学校の中野篤男先生、それぞれお忙しいところお越しいただいております。ありがとうございます。

また、二つ目の会議事項のゲストスピーカーとして、郷土愛プロジェクトに関わっておられる上伊那広域連合事務局長の唐澤直樹様、上伊那広域連合地域振興課郷土愛プロジェクト担当、キャリア教育コーディネーターの傳田智子様、KOA 株式会社経営管理イニシアティブ 地域価値創造センター ゼネラルマネージャーの南部高幸様にオンラインで御参画いただいております。本日は、限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、最初の会議事項について、まず県民文化部から令和7年度当初予算要求における、信州学び円卓会議の重点取組項目六つに関連する施策について、また、教育委員会から教育委員会の令和7年度当初予算要求ポイントについて説明をした後、意見交換させていただきますと考えております。

それでは、県民文化部県民の学び支援課の丸山課長、お願いいたします。

(丸山課長)

それでは、資料1を御覧ください。

こちらは、来年度、令和7年度当初予算要求事業のうち、信州学び円卓会議から発出されたメッセージに関するものについて、六つの重点取組項目別に整理した資料になります。なお、この資料に掲載されている事業は、主要な事業を抜粋したものであり、この資料をもって関連事業の全てを網羅しているということではございません。

また、金額は要求ベースの額であり、今後変更となる可能性もございますので、御承知おき願います。

それでは六つの重点取組項目ごとに簡潔に御紹介いたします。

まず項目①「子どもたちが学校等でやりたいことを支える」に関しては、一人ひとりの

「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求する学びの後押しとなる「ウェルビーイング実践校 TOCO-TON（トコトン）」の実施などがございます。

次に項目②「教員が学校等でチャレンジしたいことを支える」に関しては、先ほどの「ウェルビーイング実践校 TOCO-TON（トコトン）」を伴走支援する「学校改革支援センター（仮称）の設置」（以下、「仮称」を省略）などが挙げられます。

次に項目③「一人ひとりの学びや得意を共に認め合う仕組みを検討する」に関しては、子どもの多様な学びを互いに認め合うことにつながる「信州型フリースクール推進事業」などがございます。

次に項目④「長野県の中山間地域の強みを活かした特色ある学びを広げる」に関しては、中山間地域の児童生徒の学びの充実を支える「中山間地をつなぐオンライン授業支援」などが挙げられます。

次に項目⑤「『こどもまんなか社会』の実現に向けた様々な機関の連携・協働を進める」に関しては、家庭・地域・学校・行政など、様々な機関で対話を重ね、子どもの成長を支える取組の一つである「コミュニティスクール促進事業」などがございます。

最後に項目⑥「多様な学びの場を信州全体で支えるネットワークを再構築する」に関しては、子どもたちが地域産業や企業の魅力を知る職業体験などの取組を推進するための「将来世代と地域企業をつなぐプロジェクト」などが挙げられます。

私からの説明は以上でございます。

（松本参事）

続きまして、武田教育長お願いいたします。

（武田教育長）

それでは資料2を御覧ください。

1枚目について、「探究県」長野を実現するために、「新しい当たり前」を創るということで、来年度は大きく三つの観点から予算要求をしているところです。

黄色の部分と青い部分、それからピンクの部分がございます。

1ページめくってください。5ページ、黄色部分ですが、「ウェルビーイング実践校 TOCO-TON（トコトン）」を、来年1年間を準備期間として、令和8年度から実践をしていきます。この学校では、新しい学校・学びをつくっていきます。また、教員の働き方についても、新しい当たり前をつくっていききたい。それを支援するために、学校改革支援センターを来年度より設置してまいります。

次の6ページを御覧ください。今の学校現場で、先生方を忙しくしている要因の一つは、教員の欠員が生じていることだと考えています。その欠員を解消するために、一番上にありますように、欠員対策のための教員配置事業としての増員をします。また、産育休に入る方の事前配置事業としての増員については、高等学校にも拡げて増員してまいりたいと考えています。

また、教員業務支援員配置については、小中義務教育学校、特支、高校、全てに配置するよう予算要求をしています。

それから、小学校中学年における教科担任制や、中学校の生徒指導担当教員配置を拡げ

ていくことなどを要求しておりまして、こういったところから先生方の業務の縮減につなげてまいりたいと考えております。

中山間地の教育の充実については、へき地手当及びそれに準ずる手当を全国水準に引き上げるという予算要求をさせていただいており、準ずる手当、つまり任地に居住していただいた先生については、全国水準を超えるということも今検討しているところです。

次のピンク部分であります。下から二つ目について、特に中学校においては、部活動が先生方にとってお忙しい原因の一つだと考えています。令和8年度末を目途に、休日の中学校の部活動を地域のクラブ活動に移行することを目指して予算要求をしておりますし、部活動の指導員数を増やすよう要求をしているところであります。

次の7ページをお願いします。青いところでありますが、県教育委員会から発出している調査・報告類を、来年度約3分の1削減、簡略化してまいります。

県立高校における電子採点システムを導入し、できるだけ全校への導入を目指してまいりたいと思っています。

小中学校の教育課程研究協議会が現場の負担になっているという声もありますので、来年度は実施せず、どのような方向がいいのか検討いたします。

また、主幹指導主事における学校訪問では、主幹指導主事が授業参観を行わず、学校のチャレンジをサポートする方向に注力してまいりたいと思います。

一番後の部分については、文部科学省から出されているものであり、基本的には学校以外が担う業務、必ずしも教員がやらなくてもいい業務、教員の業務だが軽減したほうがいい業務に分類されているわけですが、なかなか学校ではこのことが実現できていないのではないかと考えています。

では、これを実現するためにはどのようにすればいいのか、どのようなことを県教委に望むのか、あるいは県に望むのかということを、この後先生方からぜひお聞きしたいと思います。このことについては、知事からも学校の応援団になると力強いお言葉をいただいておりますので、ぜひ御意見をいただけたらと思います。

以上でございます。

(松本参事)

ありがとうございました。

それでは、ここからの進行は、県教育委員会事務局の曾根原教育次長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

(曾根原教育次長)

教育次長の曾根原です。会議事項(1)の意見交換について、司会進行をさせていただきますので、よろしくお願いします。

今日は、ゲストスピーカーとして、現場の先生方3名に来ていただきました。先程、来年度予算に関する説明がありましたが、その内容について感想を最初に発表していただければと思います。

早津先生、お願いします。

(早津教諭)

中学校に勤務しております早津でございます。教員の人的配置について、事業の拡大をしていただいている点は非常にありがたいと感じています。私たち教員は、多忙な中で、子どものことを考えたいが、どうしても時間的な余裕がない。もう少し人がいれば、もう少しここについても考えられるが、その余裕がだんだんなくなっているという実情が、かなり強いです。

そういった意味では、欠員対策の配置補充プラス 60 人分の部分、また、産休代替もプラス 18 人ということで、こういった点をケアしてくれるのは大変助かるという印象です。

また、本校にも教員業務支援員がいてくださるのですが、武田教育長の最後の発表にもありました、教員の仕事の恐らくはグレーなゾーンで、僕らがやっているけれども本当は僕らではなくてもできる場所というのはたくさんあるわけで、その部分に関しても気軽に頼める人が近くににいるということは、非常にありがたいと思っています。

プラス、人的な配置で言いますと、今年度中山間地の教育の充実ということで、へき地手当を近隣県並みに引き上げ、プラスアルファを検討していただいている点についても、とてもありがたいと思っています。

私の今の学校は中山間地ではないですが、山間地の勤務になると、学校集団がどうしても、いわゆる年配の職員の方と、勤務校が 2 校目、3 校目の若い職員という非常にアンバランスな状況での仕事を強いられる環境がたくさんあるのを見てきました。やはり 2 校目、3 校目という勤務経験の時点では、教員としてやりたいこともたくさんあるんですけども、そうではない部分に手を取られるところがあったので、そういう意味でも、学校の教職員集団がバランスよく配置され、ただの経済的な手当のみではなく、多様な人材がへき地を含め様々な場所に均等に配置されるような方向になっていくことは、とてもありがたいと思いますし、プラスアルファの部分で、いわゆる近隣県よりも長野県を受験して、いい教員が多く長野県に集まるという状況が、今後生まれる可能性があるということも期待したいと考えます。

以上です。

(曾根原教育次長)

ありがとうございました。人的支援やお金の支援のことでも発表していただきました。続けていかがでしょうか。

では、小林教頭先生。

(小林教頭)

穂高北小学校教頭の小林と申します。私も欠員解消と働き方改革に向けた教員配置の充実の部分は、大変ありがたいと思いながら聞かせていただきました。現在、現場では欠員が多く、そこで働いている先生方で工夫をしながら対応しているような状況があります。校長先生方も常に人を探しているというような中で、来年度、こうして手厚く支援をしていただけるということは、本当に心強く思います。

まず、教員業務支援員についてですが、学校規模に関わらずどの学校も同じことをやっておりますので、全ての学校に配置していただけるのはとてもありがたいです。また、教

科担任制を中学年にも拡大し専科の先生を配置していただけることもありがたいです。

ただ、少し心配なことは、今、教員の絶対数が足りない状況の中で、新たな場所に配置するとなると、今現在いる先生方の中で回していくということになります。そうなると小学校では学級担任が足りない状況ですので、さらに学級担任が不足してしまうということが懸念されます。今後も新たな教員の確保について考えていただけるとありがたいです。

2点目ですが、多様な学びと子どもたちの心を支援するということで、スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカー事業について、時間数を増やしていただけるということで、非常にありがたいと思います。スクールカウンセラーへの相談、複雑な家庭環境の御家庭への対応についてスクールソーシャルワーカーの活用、たくさんお願いしている状況があります。来年度このように確保していただけるということは、とてもありがたく、ぜひ進めていただければと思います。加えて、スクールソーシャルワーカー等の人数を増やしていただけるとうれしいと思います。

3点目ですが、教員の業務の削減ということで、調査・報告等を削減していただけるということはとてもありがたいです。私は教頭ですが、県や国、市から、たくさんの調査が参ります。教頭が欠員の補充で担任をしている学校もたくさんあります。こうして減らしていただけると、随分助かります。

もう一つよろしいでしょうか。基本的には学校以外が担うべき業務のところを教員が担っているところ、ここがなかなか業務削減できないという状況があるということが、今お話にありました。本校では昨年度からPTA組織の再編を行い、今年度から様々な検討を行うと同時に、加入についても意思確認をしてきております。その中で、PTAの加入者が減少し、加入率は半分を切っている状況です。今まで登下校の安全に関する対応についてPTAが担ってくれていた部分が多かったのですが、加入率が下がったことで協力できる人員も減り、子どもたちの地域での安全を確保することがなかなか難しくなっています。今後は、学校だけでなく地域と連携し、子どもたちを地域で育てる、地域で守るというような組織づくりをしていかなければならないというところを感じております。

こういった部分でも、これから県のお力をお借りし、またお知恵をいただけると非常にありがたいと思っております。以上です。ありがとうございました。

(曾根原教育次長)

様々な視点からありがとうございました。小林教頭先生、1つお聞きしていいですか。今、両先生とも欠員の対策がありがたいということが真っ先に出てきたんですけれども、例えば小学校で1人急に休んで欠員が生じた際に代わりの先生がすぐに来ない場合、どのように対応して何が大変ですか。その率直な現状を教えていただければと思います。

(小林教頭)

代わりの先生がすぐに見つからないという場合には、まずは校内で対応することがほとんどです。学級担任が休んだ場合、例えば理科専科や音楽専科が代わりに対応できないか、小学校の免許を持っている先生が対応できないか、となることが多いです。それも難しいという場合には、教頭が入る場合もあります。また、校内で、教科担任制ではないですが、少しずつ授業数をみんなで分担しながら、次の方が見つかるまでは対応するようなことも

あります。

（曾根原教育次長）

ありがとうございました。教頭先生は莫大な仕事量があるじゃないですか。担任に入ると昼間は担任業務をやるんですよね。そうすると昼間やらなければいけない業務を夕方からやるような形になるという感じですか。

（小林教頭）

そうですね。私自身は担任を持ったことはないのですが、他校の様子を聞いておりますと、担任をしている教頭は、朝からクラスに入り、授業が終わってから教頭業務をしています。そうすると教頭の業務が回らなくなってしまうので、教務主任等や校長先生が教頭業務を分担して回していくという形も多いと思います。

（曾根原教育次長）

分かりました。そうすると、県でそこにすぐに人が入ってくるような仕組みができるとありがたいと。

（小林教頭）

非常にありがたいですが、人がいない現状ですので、新たな人材を確保するということはすごく難しいとは思いますが、さらに取組が広がっていくといいと思っております。

（曾根原教育次長）

この事業は県も用意しているので、何かあればすぐに教員がはまるように、義務教育課が考えております。

（小林教頭）

ありがとうございます。よろしくお願いします。

（曾根原教育次長）

では、高校の視点もありますけれども、中野先生、いかがでしょうか。

（中野教諭）

丸子修学館高校の中野と申します。よろしくお願いします。

高校は教科専門制になりますが、私は専門が商業科ということで、職業科になりますので、正直なところ普通科等の学校に異動する機会が少ないので、私が高校全ての内容を申し上げることはできませんが、私のところで今感じていることを挙げさせていただきたいと思います。

まず、高校のところでいきますと、やはり最初に目につきましたのは、県立学校の特色化事業になります。皆様も御覧になったことがあるかと思いますが、ある私立の通信制高校のテレビCMで、これまでは読み・書き・そろばんとずっと言われていましたが、読

み・書き・デジタルというのを前面に出しているものがありました。先程から新しい学校の姿といった言葉も出ていますが、私はあれを見たときにすごくハッとしました。人として育っていくところでの大事な基礎力として、単にデジタルを使えるではなくて、デジタル社会のコミュニケーション能力を育むということが書いてありましたが、やはりそういう時代の流れとともに育んでいく力というのは変わっていくべきだと思います。

それに合わせて、我々も学校というものを変えていくべきだと思います。

特に高校では、高校に行きたい云々というより、高校に行くものだという考えで来る生徒が増えています。

そういった中で学校を変えていくためにはどういうことをしていくかということは、考えていかなければいけないと思っています。たくさん予算要求を立てていただいて、様々な施策等を組んでいただいていると思いますが、全ての学校が何かものすごく特化したものに取り組むというのは難しいかもしれませんが、全ての学校が「うちの学校はこういう学校なんだ」ということに基づいた学校をつくり、中学生に選んでもらうという視点は大事だと思います。それをするためには、我々の学校はこういうことを頑張っているんだというものが一つあると、アイデンティティーといいますか、「僕たちはこういうことを頑張りたいんだな。こういうことを頑張っている学校なんだな。」ということが明確になり卒業しても胸を張っていけるような生徒と教員を育めると思います。

また、私は今、校内の教育課程を組むような担当をしています。抛り所と申しますか、どんな学校を創るかというビジョンがなければ、どんな教育課程をつくるかというのは難しいと思います。そういった中で、うちの学校はこういう学校だという胸を張って言えるものをみんなで決めて、そこに先生たちがカリキュラム編成等で乗っていくことができれば、本当に面白い学校ができると思いますし、勤務校は総合学科のため、普通科目とは違うようなオリジナルの学校設定科目等もつくっていますが、そういったものがもっともってきけると、「長野ってやっぱり面白い学校がいっぱいあるね」ということを言ってもらえるのではないかと思います。

2点目ですが、デジタル採点という話がありまして、本校では行っておりませんので、詳細については把握しておりませんが、やはり採点業務というものが本当に大変なところもあります。教員の業務を削減する上で、こうしたデジタル化というのをどんどん整備していただけるということですので本当に助かります。

これに関連しまして1点お願いと言いますか、やはり現場の一番大きい声は、高校で業務用に普段使用しているパソコンの更新が滞っていることです。先日も本校の進路指導主事が、企業さんが来たのでちょっと資料を出したいと言ったんですが、パソコンの動きが悪くすぐに資料が出せなく、別の先生に頼もうとしたら、Windowsの更新がかかってから動かないみたいなことがありました。全校に施設や備品を充実させるというのは大変だと思いますが、そのあたりもまた御協力いただければと思います。

また、教員の業務等のところで、左側（基本的には学校以外が担うべき業務）のところ、放課後や夜間に生徒児童が補導されたときの対応とありますが、補導とまでは行かなくても、生徒指導に力を入れなければいけない学校ですと、保護者の方や生徒からも、夜中に多くの電話が来ることがあります。例えば青森県のホームページをたまたま開いたときに、最初に教育委員会の名前で、「学校の対応時間外にもし緊急の何かがあれば、最寄

りの警察や消防等に御連絡ください」というようなことが出ていたりします。学校によって「うちはこの時間は対応できない」ということになってしまうと学校間で差がついてしまうと思いますが、そういうメッセージを教育委員会から出していただくだけでも、お金をかけなくてもできることはあるかなと思っています。もしそういったところもお考えいただければ我々も助かりますし、管理職の先生方が朝から夜までずっと対応することもなくなると思います。

あと最後、部活動ですけれども、部活動は大変大事な教育活動だと思います。ただ、現場でやりたい先生と他に委ねたい先生と両者いらっしゃいますので、ここの兼ね合いが本当に難しいと思っています。

皆様の御協力もありまして、我々は働き方改革が進んでいて、私も今朝、子どものおむつを替えたり、幼稚園に送り迎えに行ったりとかもさせていただけるような時間ができました。そうやって家族や自分たちの生活を大事にする時間ができると、今度その時間を休日返上して業務に充てることに違和感を持たれる先生方もたくさん出てくると思います。

ですので、これも人によって違うと思いますが、もしそういったところも先生方の代わりに指導していただける方を見つけていただくということにも予算を出していただけると、先ほどからありますが、長野でやりたい、長野は先生たちも自分の思うような生き方ができるんだよというところを発信でき、若手がたくさん志望するのではないかと思います。

大変長くなりましたが、よろしくお願いいたします。

(曾根原教育次長)

様々な点からありがとうございました。最後の部活動については、中学校は地域クラブ活動への移行が進んでいますが、高校はまだそういう状況ではないので、県としては、少しでも先生方をサポートする部活動指導員等を増やせればということも考えて取り組んでいるところであります。

高校の特色化ということで、中野先生に一つ聞きたいのは、今年、各学校で取り組んでいる特色の様子をホームページ等で発信するということに力を入れたいと思っているんですけれども、要するに、受け手がきちんとその学校でやっていることを理解してもらえようような情報発信ができないかなと、教員では限界があるので、それを外部にも依頼してみたいということがあるんですが、高校の先生としてはいかがですか。

(中野教諭)

そういったところまで御支援いただけるんだなと思いました。私は少し情報の分野は苦手なんですけど、各校に情報が得意だという先生がいらっしゃると、結構ホームページづくりや情報発信に力を入れてくださるんですが、そのマンパワーに頼りすぎますとその先生が転勤した瞬間に更新ができなくなるということが、笑い話のような感じですが結構あります。そうすると当たり障りのないホームページで、当たり障りのない情報発信になっていってしまうので、こういったところに予算をつけていただくことで、中学生の第一印象も変わってくると思います。

あと、ホームページはどうしてもストック情報になってしまうので、もっとリアルタイム性のある情報をSNSですとかいろいろなものを使って各校が発信しているので、そういったところで、どこまで現場の先生がリアルタイムに発信できるのか、どういうところまでは外部にお任せできるのかという、そのあたりももう少し現場の意見等も入れてお考えいただけると、大変助かります。

(曾根原教育次長)

情報発信はホームページだけでなく、様々なものがありますね。

時間も迫ってきたので、せっかく来ていただいたゲストの先生方に、さらにこんなことをというようなことがあればということをお聞きした後、教育委員の皆さんから御質問があれば出していただくという形にしたいと思います。あとこんなことはどうなんだろうとか、自分が頑張ってチャレンジしたいことを支えるならこんなこともしていただければ、みたいな考えがとおりでしたら御発言ください。

早津先生、ありそうな感じですけども、お願いします。

(早津教諭)

先ほどの高校のお話と絡めて、中学校でも感じる部分をお話しさせてもらいたいと思います。

1点目、先ほど曾根原先生からもありました魅力の情報発信のところをアウトソーシングしてやってもらうというのは、実は中学生にとってもとても大きいです。私は今、中学校3年生を担任していますが、今の子どもたちは、やはり最初にとっつくのは、どうしてもインターネットのような、ICT機器の活用に合わせていく部分が非常に強いです。ですので、比べるわけではないですが、どうしてもぱっと見てきれいな、例えば私立高校のホームページには担当がいると思うんですけども、それと県立高校のところを比べたときに、やはり県立高校さんの魅力をきちんと伝えていかないと、そういうところで最初の入り口のところが狭まってしまうのはすごくもったいないと感じています。

プラスして、電子採点システムの導入についてのお話がありましたが、本校は千曲市で先んじて導入をして、昨年度から2年ほど電子採点システムをやりました。一番よかったのは、例えば、今まではテスト採点の日は、何クラスも持っている1クラス2時間から3時間かかると、本当に寝る間もなく、次の日返却。しかもどうしても学校の業務だけだと終わらないので、申し出をして持ち帰りますというような場面もあって緊張感もあり、心身共に苦しいところを、この電子採点システムが出たことで、当然採点自体も楽になったんですが、いわゆる生活に支障をきたさないという心のゆとりも大きかったです。

また、電子採点システムでは、記号問題とかは一発できますので、その採点に時間をかけなくてよかったおかげで、例えば違う問題はもう少し記述問題を今までとは違ったところでやってみようかなとかにもつながっています。もっと言えば、今、期末テストで、たぶんどの学校さんも中間・期末という定期テストの形でやっていると思うんですが、電子採点システムで定期的な知識・知能を問うような問題にして、もっとフレキシブルな、例えばパソコン持ち込み可、資料持ち込み可で、もっと考える力を養うテストを別で設けるとか、そういうような方向も見いだせる、いわゆるバックアップになるかなとも思って

います。

だから、先ほどのところにも出ているんですが、私たち働き方改革で、業務を削減してほしいだけでなく、やはり自分が考えていることを実現したかったり、やりがい在那里以上に求めたりしているということは、ぜひ御理解いただけるとうれしいなと思っています。

そういう点では、「TOCO-TON（トコトン）」については、来年度から事業が始まるということで、個人的にはとても期待をしています。どうしても、やはり市や県で足並みをそろえてやっているのが強いので、そうではなくて、いわゆる尖ったというか、特色のある、普通のところではできなかったようなことを一旦やってみて、失敗しようが何しようが、こういうことが分かりましたとか、こういうふうにやってみましたという実践が、自校だけでなく他の学校にとってもすごく刺激になりますし、そういったことに、いわゆる経済的な支援や予算をつけてくれているというのは、とても楽しみ。来年、再来年度以降、本校はそこに手を挙げていないんですが、ほかの学校さんがどんなことをやるのかということ、たぶん全県も注目しているんじゃないかなと感じています。

（曾根原教育次長）

ありがとうございました。

時間になってきましたが、御発言したいことがあれば。中野先生、お願いします。

（中野教諭）

欲しいと思っていたのが資料2に載ってまして、学校改革支援センターという、詳細は分かりかねるんですが、これは本当に思っていました。本校も今、学校を変えたいなど、小さい改革ですが、例えば6時間×週5日間、当たり前の高校ってこんな感じというのがあるんですが、こういうのを壊したいと思っています。

例えば生徒は、みんな同じ進路を描き、同じことがしたいというものではないので、教室でみんなでやるべき授業もあれば、本当に生徒の希望に沿った授業をするというものもあります。そのときに、どうしても授業だけではできない学びというのはたくさんあると思っています、そういったことにもっと対応できるよう、学校の中を変えていきたい。例えば、金曜日は午前中は授業をするけれども、午後は授業はしない。その代わり、本校なんかもそうですが、現在最大の地域貢献は高校生のアルバイトという現状も、正直あるんですね。高校生がアルバイトに来てくれないとお店が回らないよというのもあったりする。それが教育活動としてふさわしいか分かりませんが、そのところで、ただ遊ぶお金が欲しいとかではなく、家庭のためという子もいれば、そこで社会の大事なことや社会人基礎力を学んでくる生徒もいます。こういったこともたくさん、これからの学校として入れていくことができるようなカリキュラムをつくりたいと思ったときに、御相談する方が見当たらないと言いますか、私が知らないだけかもしれませんが、例えば、今後カリキュラムコーディネーターですとか、学校改革支援員のような方がいらっしゃるいいと思いました。高校再編とかになると県教委の先生方が来て間に入ってくれるので相談ができるんですが、そういった伴走者が、例えば2年間はこの学校で、のような形でつけていただいたりすると、我々も御相談しながら、もっと高校も思い切ったことができるようになる。ど

んな方をコーディネーターにするのかという課題もありますが、ぜひ御検討いただけると、私たちがやりたいことがもっと進むし、高校改革というか、高校も新しい学校づくりが進むと思いますので、ぜひお願いしたいと思います。

(曾根原教育次長)

ありがとうございました。学校改革支援センター高校版もどうかという、今の提案を聞いても、アルバイトの話もなるほどと思って聞かせていただきました。

申し訳ありません。司会の手際が悪くて時間になってしまいました。

教育委員の方で、先生方に聞きたいなということがあれば、お一人いかがでしょうか。よろしいですか。

それでは時間になりましたので、3人のゲストの先生方からたくさんのお話を聞けて、私も勉強になった、参考になった点が多々ありました。では皆さんで、3人の皆様に拍手をお願いいたします。

では、進行をお返しします。

(松本参事)

ありがとうございました。

次に、会議事項(2)に入ります。意見交換に入ります前に、本日の会議事項に関連して、具体的に地域で取組をしていただいている郷土愛プロジェクトの事例を紹介させていただきたいと考えております。

郷土愛プロジェクトは伊那谷全体で産学官連携による地域資源を活かしたキャリア教育を実践されています。

それでは、プロジェクトの概要等につきまして、まずは、上伊那広域連合、唐澤事務局長様から御説明のほど、よろしくをお願いしたいと思います。

(唐澤事務局長)

上伊那広域連合事務局長の唐澤と申します。本日は、このような機会をいただきましてありがとうございます。本日はオンラインでの発表になりますが、よろしく願いいたします。

それでは、郷土愛プロジェクトについて発表させていただきますが、時間も限られておりますので、資料の主要部分についてご紹介いたします。

発表の流れですが、発足の背景、事業内容、課題等の順番で行います。

12 ページ、最初に発足の背景ですが、プロジェクトの前身が発足した 2011 年当時、産業界では、若者、これは特に高校卒業後、大学等に進学して上伊那地域を離れた若者のUターン率が非常に低いこと、また中学生の職場体験については、お仕事体験になっていて、企業側が本当に伝えたいことが伝わっていないのではないかという課題、学校側では、職場体験の受け入れ企業が少なくことや、体験の内容が十分でないこと、学校だけではキャリア教育に限界があることなど、行政や地域で少子高齢化の加速やそれに伴う地域の担い手不足、伝統や祭りの継続の危機など多くの課題があり、このままでいいのかという思いが重なっていました。

13 ページ、この頃、伊那市の教育委員会において、キャリア教育推進委員会が発足し、伊那市をモデル地区として、産学官で緩やかに連携を始める事業を開始しました。

上伊那地域では、上伊那の8市町村長と、県経営者協会上伊那支部所属の代表企業のトップの皆さんと年1回懇談会を行っており、この場でキャリア教育の推進には広域的な取組が必要との意見が出され、正式に郷土愛プロジェクトが発足しました。

行政が関わる取組は行政が旗振り役になりがちですが、産業界から提案があり取組が始まったことが非常に大きかったと感じております。

事業としては、この年に伊那市で最初のキャリア教育上伊那交流会が開催されました。当初事務局は伊那市の教育委員会になっておりましたが、プロジェクトが上伊那の広域的な取組であることから、2016年からは事務局が上伊那広域連合内に移り、組織の外郭団体の事業として、企業からの寄附金や市町村からの負担金を原資に活動を行っております。

14 ページ、プロジェクトのメンバーですが、徐々にメンバーが広がり、現在は産学官地域合わせて36団体、60名のメンバーで構成されております。また2017年からは、元小学校の校長先生だった方に事務局に加わっていただき、小中学校の先生方の参加や協力が大きくなったこと、また市町村の教育委員会の管轄外である上伊那地区の高校の先生方の協力も非常に大きな力になったと感じております。

15 ページ、発足当時からの思い、プロジェクトの向山会長のメッセージです。今を生きる私たちは、10年後、20年後、30年後の伊那谷に、どんな人・もの・ことをつないでいけばいいのでしょうか。郷土愛プロジェクトは、よりよいふるさとの未来を担う人材を育成したいという思いで立ち上げたものです。

私が当時特に印象に残っているのは、この取組は30年は続けないといけないと向山会長がおっしゃっていたことです。今、こうして10年以上続けられていることは、関わっていただいた全ての方のおかげと感謝をしております。

16 ページです。プロジェクトの事業ですが、大きく三つ。産学官協働事業、次世代育成事業、情報発信・活用事業に分かれます。それでは、それぞれの活動について具体例も含めてお話をしたいと思います。

17 ページです。最初は産学官協働事業です。

その代表的な活動が、先ほどお話ししましたが、2014年から始まっているキャリア教育上伊那交流会です。上伊那8市町村持ち回りで開催しており、今年度で11回目、参加者合計数は3,040人に上っています。

目的ですが、キャリア教育のよりよい在り方を考え、参加者それぞれができること、地域づくり、次世代育成などの担い手になる機会にすることです。現在はこの企画運営は開催市町村で組織する実行委員会が中心で行っており、今年度は駒ヶ根市で開催され、産学官、地域の方や、駒ヶ根市内の学校の中高生合わせて500名ほどの生徒の参加で開催されました。

今回は、『自分のことをちょっと考えてみない?』〜かみいなミーティング 出会い・驚き・発見〜をテーマとして、八つのトークテーマについてそれぞれグループに分かれトークセッションを行いました。参加者の声については④にあるとおりですが、参加した生徒からは、いろいろな考え方や生き方を知ることができ、将来が楽しみになったなど、参加してよかったとの声が聞かれました。

18 ページです。続きまして、次世代育成事業。

これは学校に対する支援活動になります。学校や生徒の問いや願いに応じて、地域とつなぐ。企業等の地域の人に参加しやすい仕組みをつくること。プロジェクトが核となり、地域や大人と学校、子どもをつなぎます。

それぞれのニーズについては、例を御覧いただきたいと思います。昨年度実績で対象の生徒数が約 2,500 人、実施した学校は中学・高校 9 校で、関わった社会人の講師は 300 名以上となります。

事例として、伊那西高校では毎年キャリアフェスを開催しており、今年度は上伊那の 23 社の企業団体が学校に出向き、ブースを設置して、担当者や学校 OG の社員から全生徒 355 名が企業での働き方やプライベートなどの暮らしについて話を聞いたほか、質問などを通じて学びました。

学校支援活動については、発足当時は小中学校の支援が中心でしたが、キャリアフェスなど市町村単独でできるようになってきたため、現在の中心は高校になっています。

最後に、情報発信・活用事業です。

プロジェクトでは常時ホームページによる情報発信を行っておりますが、事例としては、「Hi, (ハイ)」という冊子を紹介しています。目的として、中学生が主体的な選択ができるよう、高校選択や地域の生き方の情報を伝える冊子を作成して、上伊那の全中学 3 年生、約 1,800 名に配付いたしました。なお、今年度は県の地域発元気づくり支援金も活用させていただき、作成いたしました。

学校・生徒からは、「上伊那の高校の特色を比べながら見ることで、進路選択の参考になった」など、保護者からは「親子で一緒になって、高校や上伊那について考えることができた」などの声をいただいております。

10 年以上続けてきた成果につきましては、子ども・家庭・地域・学校・産業・行政において、良い結果が出ているのではないかと考えております。それぞれの価値・メリットにつきましては、後ほど資料を御覧ください。

成果については、目に見える成果も少しずつ現れ始めており、例えば中高生の頃、プロジェクトの事業に参加した大学生が、自ら主体となって未来ラボというイベントを開催したり、職場体験やキャリア教室に参加した生徒が地元企業に就職したりしてくれたなどの声も聞かれます。

以上、お話ししてきましたが、私たちの大切にしたい郷土愛とは、アイデンティティー、価値観、シビックプライド、世代を超えた想像だと考えています。

最後に課題についてですが、よく参加した生徒が上伊那にどのぐらい戻ってきましたかという質問を受けるのですが、正直このことを把握することは大変難しく、人数など具体的なことをお示しすることができない状況ですので、今後の課題と考えております。ただ、10 年以上活動してきて、子どもたちの多くがこの地域を深く知る機会が増えたということは事実です。大学等の進学に際してこの地を離れる子どもたちが、地域を知っていると知らないのとでは、例えばこの地域への U ターンなどを考えるとき、大きな違いがあると考えています。

私たちは、郷土愛プロジェクトをさらに発展させながら、今後のこの取組を 20 年、30 年と続けていきたいと思っております。

以上、郷土愛プロジェクトの事例発表をさせていただきました。
本日は御清聴ありがとうございました。

(松本参事)

唐澤事務局長様、ありがとうございました。

引き続き、産業界の立場から、このプロジェクトに関わっておられる KOA 株式会社南部ゼネラルマネージャー様から、プロジェクトを通して産業界が子どもの学びに関わることの意義、また思いについて御発言をいただければと思います。

南部様、よろしくお願いいたします。

(南部氏)

KOA 株式会社の南部と申します。よろしくお願いいたします。

今、上伊那広域連合の唐澤事務局長からも御説明がありましたが、この取組の原型は、2004 年の経営者協会での職場体験で、企業として実務を伝えるだけでなく、人として大切なことをどう伝えていくかというようなことを、経営者協会のほうでマナー集をつくったこと、これに端を発してこの取組がスタートしたと思っています。

その後、そういったマナー集がしっかり活用されているかどうか検証したんですけれども、実際にはしっかりと使われていないという現状も見えてまいりまして、2010 年度以降、上伊那としてキャリア教育の在り方をどうしていくかというようなこと、また、国のほうのキャリア教育についてどう考えるかというようなタイミングと重なったこともありまして、2010 年以降、上伊那の中で産学官が、将来のキャリアを生徒さんたちにどう考えていただくかということに対応できるようなタイミングができたというのが、非常に大きかったと思っています。この対話ができたことで、将来を担う若者の育成ですとか、何が足りないかということがある程度明確になって、郷土愛の取組につながっております。

企業も、次世代の人材をつくることは、学校現場で行うこと、もしくは家庭現場で行うことという認識ではなくて、企業もここに積極的に関わるのが大切だという認識を持ちまして、少しずつですけれども、この 10 年間かけて、企業が地域の若者をつくっていく、人材をつくっていくということの理解が進んでいったと理解しています。

ただ、人材育成というのは一日二日で簡単にできるものではなくて、小さく生んで大切に育てていくというような感覚が非常に大事だろうと思っています。

先日も大学の就職課の職員の皆さんと関わる会議がありました。そこに 200 社の企業さんが参加して、大学の就職課の職員の皆さんと議論する中で、この上伊那の郷土愛プロジェクトの取組について話題になりました。皆さんが口をそろえてお話しされたのは、どうしてこういった取組が産官学で長く継続できるのかというようなことで、盛んにたくさんの質問をいただきました。

ということもありまして、コンサルティング会社を挟んだりせずに、産官学がみんなで歩み寄ってこの取組を続けられたというのは、やはり郷土に人材をきちんと残して行くという目的が明確だったから、だから続けられたし、継続できたんだろうというふうに思っています。

今後も企業として、県の皆さん、それから市町村の皆さんと連携しながら、地域の人材

はみんなで連携してつくっていくというような形で進めていければと思っておりますので、ぜひ今後も、企業として、しっかりとこの問題を真ん中に据えて、取組をしていきたいと考えております。

私のほうからは以上でございます。

(松本参事)

ありがとうございました。

今、上伊那の事務局長様から概要を、また南部様から、企業としてこのプロジェクトに取り組む意義といったものもお話いただきました。今のお話の中で、先ほどの事務局長様のお話だと、2014年に郷土愛プロジェクトが発足したというようなお話だったんですが、その10年前の2004年からそういった問題意識を持って、小さな種というか、そういったものがあったというようなことを聞いて、足かけ20年、もうこのプロジェクトをずっと、大きさはいろいろあるかもしれないんですけども、携わってきていただいているというようなことに、とても敬意を表したいですし、やはり時間がかかる取組なんだろうなと思います。

先ほどのお話の中で、向山会長が30年この取組を続けるというようなことをおっしゃっていたということなので、やはりしっかりと時間をかけた結果、上伊那地域でこういった取組が根づいているということなんだろうと思って聞いておりました。

先ほど、安曇野の小林教頭先生からも、子どもたちを地域が守るというようなお話もございましたが、守るという点で若干違うのかもしれないですけども、やはりいろいろな形で子どもたちを地域の中で守っていくとか、学びを育んでいくということの取組は、これから一層求められるのかなと思って聞いておりましたが、教育委員の皆様、今のお話を受けて、御感想や、こんなことをもう少し深掘りして聞いてみたいといったことがありましたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

中川委員、お願いします。

(中川委員)

中川と申します。お話ありがとうございました。まず、感想としては、産業界の皆さんがただ「官」に要求するという立場ではなくて、主体的に動いてくださったということがものすごく心強いことだなと思ってお聞きしておりました。

しかも、30年やるというすごい覚悟を持って始められているんだなということもあるんですけども、私も元教員で、現場で働いていたり、最近では地域学校協働活動のようなものに関わっていたりするんですけども、そういう中にこういうプロジェクトをやっている人たちがいるということは、ものすごくありがたい存在だと思っております。

やはり、そういう大人の背中を地域の人たちが見て、また子どもたちが見て、先ほど、どの程度戻ってきているのかというお話がありましたけれども、私は、もしかしたら誤解を生むかもしれないんですけども、今戻ることだけが正解ではないのではないかと思います。やはり郷土愛と言うからには、そこにどのように貢献していきたいと思ってくれる人を育てていくのかということで、今の関係人口だとかそのようなこともよく言われるようになりましてけれども、戻ることだけが正解ではないんだろうなという

のを思っているところです。

なので、このノウハウをもし広めていく場があったり、今のようなお話をする場があれば、よりいろいろな地域で似たようなことをやりたいなという産業界の方が増えるのかもしれないなということ思いながらお聞きしておりました。そのプロジェクトは、他地域からお呼びがかかったりすることはどのくらいあるのかなというのをお聞きしたいと思いました。

(松本参事)

唐澤事務局長様、今の他地域からの問合せであるとか、視察であるとか、そんなようなことは結構あるんでしょうか。

(唐澤事務局長)

ホームページがあったりするものですから、頻繁にはないんですけども、他県の議員の方が視察に見られたり、問合せや資料が欲しいという話は、少しではありますけれどもあります。

(松本参事)

南部様、いかがでしょうか。ほかの企業様から何か問合せがあったりとかということは、KOA 株式会社様のほうにありますか。

(南部氏)

当社を通じて、東信の企業さんからお問合せがあって、キャリア交流会のほうにオブザーバー参加をしたいということで参画いただいたというようなケースもございまして、どうやって取組を立ち上げればいいのかという御質問をいただいたケースがございます。

(松本参事)

中川委員お願いします。

(中川委員)

すごく大変なことだと思うんですね、継続していくということは。たぶん仕事とは別にやられていたりするところだと思うので、本当に尊敬します。今後もぜひ、30 年と言わず、40 年、50 年と続く事業になるといいなと思っています。ありがとうございました。

(松本参事)

ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

矢島委員、お願いいたします。

(矢島委員)

ありがとうございました。教育委員の矢島と申します。私も上伊那ですので、本当に誇らしく思います。

私がお聞きしたいのは、今いただいた資料の中で幾つか写真が掲載されておりますけれども、子どもたちの参加とか、学生さんの参加のところでは、女性だったり、男性だったり、様々な方が参加されていると思います。今、学校のクラスを見ても、その割合として、多様性の時代と言われておりますけれども、男女半数ぐらいの割合で、それにプラス外国籍の人、それからLGBT、性的マイノリティーだったり、発達に特性や障がいがあったり、不登校経験者の方だったり、様々な子どもたちがいるわけですね。

その中で、そのような多様な子どもたちがプロジェクトに参加されていると思うのですが、郷土愛プロジェクトの中で、どのような形で大人の多様性があるのかという観点。なぜかと言いますと、例えば子どもたちが職場体験に行ったときに、最近の報道だったと思いますが、長野県の女性の社長の割合が全国で43位という記事が出ていました。女性が職場体験に行っても、常にリーダーが男性だけではなく、男性がいけないということではなくて、女性だってリーダーになれるとか、よい大人のモデルであるとか、リーダーのモデルが同性だったり、外国籍の方だったりすると、その多様性で、「ここはこういう人がいるんだ。自分が子どもを産んで育てていてもリーダーになれるんだ」というような大人のモデルがあったらいいなと思います。

そうすると、自分も外に出てもまた戻ってきて、長野県でこんなふうに生み育て、そしてリーダーになれるんだというようなモデルがあったらいいなと思うんですけれども、郷土愛プロジェクトの中での大人の方たちの多様性がどうなのかというところをお聞きしたいです。

(松本参事)

ありがとうございます。

唐澤事務局長さん、いかがでしょうか。

(唐澤事務局長)

担当の傳田からお答えをさせていただきます。

(松本参事)

傳田さん、お願いします。

(傳田コーディネーター)

郷土愛プロジェクトのキャリア教育コーディネーターをしております傳田と申します。よろしくお願いいたします。

大人側の多様性ということで、私たちもすごく大事な点だと考えております。例えば、運営側としても、子どもを育てながら、またUターンして帰ってきている私のような存在も、こうして地元で働けて、自分のやりたいことを実現させていくようなことができたり、女性のキャリア教育コーディネーターという立ち位置で、市町村で活躍されている方はたくさんいます。

全体会議でも、向山会長も「この会は女性が多いね」ということを言ってくれますが、子どもたちの代弁をしたり、未来のことを考えるというあたりで、男性も非常に大事です

が、女性はより近いものがあるのではないかなと思ひまして、私どもも女性であつたり多様な方、また企業さんも KOA さんは大企業さんで御活躍してくださっていることも大変ありがたいですが、例えば農業だつたり、自営業であつたり、起業された方であつたり、いろいろな方に関わっていただけるように、様々な事業を工夫させていただいております。

また、ロールモデルということはとても大事な事かと思ひます。「Hi,」の冊子のほうも、高校選択ということをして最初の切り口にさせていただいておりますけれども、最後のほうに、ロールモデルとなるように、中高時代から就職に至った部分までを含めた、地元で働いている方、男女含め、そういった方のストーリーを紹介させていただいております。就職の前の高校選択ということをして切り口にしながら、将来のことも少し考えたり、ここで働いていくこともできるんだというようなことを、いろいろな場面を感じてほしいなと思ひて事業を進めております。以上です。

(松本参事)

ありがとうございます。

特にこの「Hi,」は、今傳田様がおっしゃったように、高校の選択のみならず、少し遠い未来というか、子どもたちにとって身近な未来のロールモデルを描いているというのは、とても素晴らしいなと思ひて私も見ていました。

また、この郷土愛プロジェクトが子どものみならず、地域の大人と関わりながらいろいろなことをやるということが、子どもたちが身近に自分たちの将来、少し大きくなった自分を見据えながら、こういうことで自分がこの地域で活躍できるのかなみたいな、そういうヒントを子どもたちがイメージできるような取組になっているということも、素晴らしい点かと思ひて聞いていました。ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

峯村委員、お願いします。

(峯村委員)

教育委員の峯村と申します。今日はありがとうございます。今、ちょうど冊子についてお話があつたので感想ですが、これはとてもいいですね。素晴らしいなと思ひました。我が子は中3ですので、その先を見据えてとおっしゃっていますが、この高校選択というところ、県立の高校がこのように分かりやすくビジュアル的にも素敵にまとまっている冊子はなかなかないと思ひますので、先ほど早津先生もおっしゃっていましたが、こうやって県内の高校を一堂に見ることができて、その先も考えることができる資料ということでも、とてもいいものだなと。ぜひとも我が町にも欲しいなと感じました。

良くも悪くも、子どもたちにとって保護者の発言はすごく影響が大きいと思うんですね。子どもたちに対して「ここっていい町だよな」とか、「この町って暮らしやすいね」というような言葉が自然と出てくるような、そういうものがあるといいのかなと。やはり子どもたちにそういう影響が大きいのかなと思ひます。

そのためには、保護者も地域のことを知る必要があるなと思ひたんです。地元であつたとしても、やはりこういうことで地元のことを再度知るというか、学び直すという機会があるということがとても大事だなと思ひますし、あと、逆にわが子が興味を持って楽しく

取り組んでいることには、親もそういう関心を持つと思うんですね。

自分の子どものことをまた話しますけれども、中学校3年生が総合学習の中でディスカバリーという、その町のことを学ぶというか、企業に入っていっていろいろなことを体験させていただくというような活動があったんですけれども、その活動を保護者参観日に保護者に向けてプレゼンをしてくれたんです。そういうことを通して、子どもたちがどういうことに関心を持っていたのかとか、地元にある企業が今こうなっているんだとか、そういうことを子どもの目を通して親も知ることができたということで、とてもいい機会だったと感じました。

さらには、ほかの町と比べてどういう暮らしやすさがあるのかとか、今の地域経済がどうなっているのかとか、そういうところまで保護者も関心を持っていきたいと思うんですけれども、なかなかそれを知る手段や機会が、何となくこうじゃないかなというようなことはありますけれども、今のこの地域の経済がどうなっているのか、他市町村と比べて、他の自治体と比べてどんなところが経済的にも、これは行政のお仕事かもしれないですけども、こういう手当があって子育てしやすいよとか、そういうような発信がされていて、保護者も「ここはすごくいい町だね」と、子どもたちにも「戻ってくるといいよ」というようなことを家庭の中で話せるような取組がされていくと、もっといいなと感じました。

以上です。ありがとうございました。

(松本参事)

ありがとうございました。

申し訳ございません。時間が来てしまいまして、ほかの委員さん、本当は今日せっかく来ていただいている先生たちにもこの取組にどんな感想を持たれたか聞きたかったんですけれども、申し訳ありません、またの機会ということで、ありがとうございました。

4 まとめ

(松本参事)

それでは、予定していた時刻になってしまいましたので、これまでの議論を受けまして、最後に知事、教育長から一言ずつ、本日のまとめをお願いしたいと思います。

まず、阿部知事、お願いいたします。

(阿部知事)

まず、実情の御報告をいただいた各先生方、それから郷土愛プロジェクトの皆さんには大変感謝申し上げます。

事務局へ注文ですが、総合教育会議の原点をしっかりと確認して進行してもらいたいと思っています。地教行法第1条の4で書かれているのがこの会議でありまして、これは協議をする場です。誰が協議するかというと教育委員会と私が協議をする。意見を聞いて参考にしますということだと、たぶん総合教育会議としての意義が薄くなってしまうと思うので、ぜひこの参考に意見を聞かせていただいた上で、具体的に、じゃあ教育委員会は何を

するのか、知事は何をするのか、そこをしっかりと方向づけをしないと、参加いただいた皆様方にとっても申し訳ない結果になってしまうので、それは次回以降少し工夫をしていたきたいというのが1点です。

それから、全体を通じて私から5点お話ししたいと思います。

まず1点目、武田教育長からお話しいただいたように、私も学校の応援団としてこれから行動していきたいと思っています。その中で校長会の皆様方等にも言っているのは、私の役割は二つだと申し上げています。要は、余計なことは介入するつもりはありませんので、一つは私の責任と権限で予算をしっかりと確保していくこと。もう一つは、政治家の立場で、教育公務員の皆さんは政治活動がかなり厳格に制限されている中で、例えば保護者の皆さんとの関係性をどうするかとか、なかなか学校からは発信しづらい、言いづらいという部分がたくさんあると思っており、そういうところは私のほうから発信したり、呼びかけたり、あるいはお願いしたり、断ったり、そういうことをしていきたいと思っていますので、ぜひ学校の先生方には、そういう形で私を利用していただければありがたいと思っています。

それから2点目でありますけれども、高校の特色化、先ほど中野先生からも話があったように、各学校でどんどん進めていただきたいと思っています。これは先ほど発信の話もありましたけれども、ある学校の生徒から言われて私はこういう形で発信をしようという形になっているんですが、先ほどもお話があったように、中学生の人たちは、もう偏差値輪切りでしか学校を選べない、学校側の発信はないよねということ、それから特色がないよねというところが一番の課題でありました。

そういう意味では、学校の特色化というのは、単に偏差値で輪切りするような教育から脱却するんだというメッセージだと私は考えていますので、つい一昨日も松川高校に行ってお話をしてきました。松川高校はアントレプレナーシップに力点を置いて取り組んでいきたいとおっしゃっていましたので、ぜひそういう取組をどんどん各学校で方向づけをして進めていっていただきたいと思いますし、教育委員会には、そうした取組を全面的に支援していただければありがたいと考えています。

あと三つ、提案ですけれども、先ほど松川高校の話もさせていただきました。あそこは県立大学の大室先生が入って、市町村と地域の皆さんと学校の関係者と一緒に調整をさせていただいている状況であります。そういう意味では、これは知事部局がやるのか、教育委員会がやるのか、一緒にやるのがいいのか、そうした学校の改革とか、特に地域連携であったり特色化だったり、なかなか学校だけでは難しいところを考えるサポーターと言うのがいいか、コーディネーターと言うのがいいのか、そういう人たちを、例えば県公認で何人か置いて、学校が特色化したいと、学校改革支援センターは支援センターでいいんですけれども、高校などでは特に社会経験が豊富な方が、世の中を広く見渡して世間を見ながら特色化していくということは大事だと思いますので、そういう方々が必要ではないかというのが3点目です。

それから4点目ですが、私は飯田で保育士体験をさせていただきました。学校の先生のなり手も足りなくて困っていますが、保育士であったり、介護士であったり、いわゆる地域のエッセンシャルワーカーと言われる方たちが本当に確保できなくなっているという状況になっています。

これは教育委員会の皆さん、学校の先生方にもよく深く理解していただきたいんですが、やはり地域の皆さんは子どもたちとか学校に対してすごく期待をされています。これは提案ですが、例えば、もう少し学校の特色化を進める中で、例えば保育士とか介護士体験を義務化してしまうとか、これは、先ほど言ったように、知事の権限で強制するつもりはありませんので、何かそういうことを市町村教育委員会単位であったり、学校単位であったり、もっと地域の切実な思いをしっかりと受け止めて考えていただきたいと思っています。

ちなみに、阿島傘をつくられている喬木村へ行ってきました。喬木村の小学生は、毎年阿島傘を伝統教育として作り方を自分たちで体験して学んでいると。こうした教育をやっているのは日本で唯一ではないかとおっしゃっている方もいました。

そういう意味では、地域のエッセンシャルワークを体験する、それからその地域でしかない伝統や文化を深く学ぶ、こうしたことを、ぜひ学校はカリキュラムの中に入れていただくことを御検討いただければありがたいと思います。

それから最後、長野県の今の最大の課題は人口減少問題でありまして、人口減少について、ずっとこの1年間、若人たち、学生たち、高校生や大学生も含めて意見交換をさせていただく中で、信州未来共創戦略ということで、県民会議でまとめていますが、それは教育委員会の皆さん、共有されていますか。

(松本参事)

これからのようです。

(阿部知事)

分かりました。たぶん今日の話もそれを参考にしていただきながら話していただいたほうが本当は良かったのではないかと思います、その中に信州の学びの話と、多様な人材の確保、いずれも今日のテーマと深く関係があることが戦略としても書き込まれています。

ぜひ教育委員の皆さんに信州未来共創戦略をしっかりと把握をしていただいて、実現は県民全体で取り組もうというようにしていますけれども、我々行政、教育委員会であったり私であったりがやるべきことがそこに方向性として書かれていますので、私も知事の立場としてしっかりこの実現に向けて取り組んでいきますが、武田教育長をはじめ各教育委員の皆さんにも、これは県民会議で方向づけをしたものでありますので、ぜひしっかり念頭に置いていただいた上で取り組んでいただきたい。これはこの場をお借りして強くお願いしておきたいと思います。

長くなりましたが、以上です。よろしくお願いいたします。

(松本参事)

ありがとうございました。

引き続き、武田教育長、お願いいたします。

(武田教育長)

どうもありがとうございました。今、知事のお話にもありましたように、知事が学校の

応援団となってくれるということをおっしゃっているので、ぜひ今日来ていただいた現場の先生方にはそういったことをお伝えいただいて、そのことだけでも現場に勇気を与えるんじゃないかと思いますので、よろしくお願いします。

それから、郷土愛プロジェクトについては、私も5年間一緒にやらせていただいて、若者の人材育成というのもあるかもしれないですが、私は大人も育っているんだなということも思っていました。その一番は、やはり郷土愛プロジェクトの皆さんが楽しんでやっているということが一番で、なぜ楽しいかという、参加している全ての人が主体者であるということです。評論家や傍観者ではないというのが一番郷土愛プロジェクトの素晴らしいところだと思ってきました。

そういった意味で、ぜひこれからも「上伊那から日本、世界を変える」というのがキャッチフレーズだと思いますので、力強く進めていっていただけたらと思います。

どうもありがとうございました。

(松本参事)

ありがとうございました。

ゲストで御参加いただきました皆さん、本当にありがとうございました。引き続き現場で、地域において子どもたちを支えていただきますようよろしくお願いいたします。

また、地域振興局の方も傍聴していただいていると思いますので、地域の中でこのような取組を広げていただければと思っております。

5 閉会

(松本参事)

それでは、本日はこれで閉会いたします。どうもありがとうございました。

(了)